

音楽の間、心の「間」

渋谷教育学園渋谷高等学校 二年 高野 知宙

どんな楽器に奏でられる音でも、消えゆく時に余韻はある。しかし余韻をただの音の余りではなく音楽の一部として聴かせようとする楽器には、得も言われぬ魅力がある。

例えば三味線。「さわりをつける」と言っ、三味線の糸巻の近くにある金具を回すと、弦がとても細かく震えるようになり、弦本来の音にびいびいんという響き加わる。

撥を弦に叩きつけた直後、滝壺に水の届く一瞬のような、割れるように力強い音が鼓膜を打つ。その後は雑踏のようにざわざわとして、消え入る直前は風が稲穂を揺らすような微かな音になる。音が聞こえるというよりかは、震えが頭に残っていると云った方が正しいかもしれない。そして余韻が消える瞬間、真空に投げ出されたような静寂がやってくる。そしてまた、撥を打ちおろす。

我々現代人は、この一瞬の沈黙を、間を、味わうことを忘れてはいないだろうか。流行りの曲はとても早口で字幕には細かい文字が溢れており、その背後で流れる音も息もつかせぬ密度だ。それを悪いこととは思わない。だがいつの間に関に日本人はこんなに忙しなくなったのだろうか。現代人の生活の余裕のなさ、スケジュールが埋まっていることが一種のステータスであるような風潮が、音楽にも表れているように思う。

音楽は、人間の心そのものだ。西洋の合理主義が日本人の心に植えつけられて、音楽も変わったのだろうか。そっと目を瞑り、考える。三味線は時々封建時代の象徴という窮屈な肩書を与えられるが、本来はとても自由な楽器だ。合わせるべきリズムが細かく刻まれることもない。激しくかき鳴らすもよし、沈黙するもよし。そこには常に絶妙な「間」があつて、音楽が途切れたという印象を与えない。非常にのびのびとしている。

のびのび、と書いてふと思ひ出したのは、明治初期の写真に写る人々の笑顔の多さである。写真が珍しいものだったということはあるかもしれないが、皆自然な笑顔で収まっている。それと比べて、町に行く現代人の表情は硬い。時計によって時間が区

切られ、夜になっても電気の下で活動できる以上、生活が忙しくなるのは当然だろう。しかしそれが心に反映されて、余裕とともに感受性までもがなくなっていくとしたら、私は文明の発達を素直に喜べない。それは人間が自分たちの生み出した文明に飲み込まれている、ということになると思う。

前近代と近現代の違いの一つは「間」の有無だろう。また日本人のかつての魅力は、それを楽しみ芸術にする術を持っていたことだろう。そして笑顔をつくった。「間」という一見何も無いように思われる空白は、実は時間の大事な一部であって、それがあることで間でない時間が回っていく。必要でないことを削ぎ落とすのは必ずしもいいことではないと、ここまで考えてしみじみ思う。

また「間」は周りの人との息遣いを合わせるのに重要な時間でもある。何の合図もないのに同時に息を吸い、次の動作のタイミングがぴったりと合った時の、あの頭の中のしびれるような感覚は、味わう度に一瞬の空白の有難さを教えてくれる。三味線の合奏の時などは、音が消えて浮いたようになった体を「間」の終わりと共に三味線に振りおろして音にするのだが、幾人もの人の音が重なった時、まるで自分の三味線のたった三本の系から、数えきれないほどの種類の音が溢れ出るような不思議な感覚に襲われる。周りを聴こうとする無意識の余裕や調和、そこから生まれる感動をも「間」はもたらしてくれる。

しかしこんなことを書いている私も現代人だから、三味線の稽古にたっぷり時間を割くのが惜しく、つい鳴らすべき音だけ鳴らして余韻を端折ってしまう。それでは本当に三味線を弾いたことにはならないと気がついたのはついこの間のことだ。このコロナ禍、家で過ごす時間は今までより多くあるというのに気が急いている。恐らく家で何気ない時間を送ることが、怠慢のように思われるからだろう。この考えは改めた方がいい、と自分にしばしば言い聞かせるようにしている。何もない時間もまた、そこに意味があると気づいたから。

時代が進むにつれて時間との向き合い方が変わるのは当然のことだが、その中にもっても日本人の「間」という心の余裕は普遍的なものであってほしい。

「間」は偶然生まれるものでも、潰すべきものでもない。自ら進んで取りに行き、味わうべきものなのだろう。私は三味線の音の消え入るその瞬間を聴くたびに、強くそう思う。